

## キャニオン・サパタ

大友 篤

日本のような島国で育つと、国と国とを隔てる国境線を現実を知ることはできない。私は、以前から国境に興味をもち、外国に出かけるたびごとに、国境を徒歩で越える機会があったらと願っていた。外国旅行を何度も経験したが、飛行機を利用するため、国境を越えるという実感はなかった。また、韓国の板門店付近や、タイとカンボジアのタイ側の国境付近まで行ったことはあるが、国境を越えたわけではない。しかし、1986年12月初旬ついにその機会を得た。メキシコとアメリカ合衆国の国境を徒歩で越えることができたのである。しかし、合法的にではなく、非合法的にである。1986年11月から12月にかけて、国際協力事業団のメキシコ人口計画プロジェクトに関する技術援助のため、7度目のメキシコ訪問をした際、メキシコからアメリカ合衆国への不法出国者調査の現地視察をしたが、その際、メキシコと合衆国の国境を徒歩で越えたのである。

視察の一環として、合衆国のサン・ディエゴと川をはさんで隣接するメキシコのティファナにある北部国境大学院を訪問し、この分野の専門家であり、この大学院の学長でもあるブスタマンテ教授に会った。彼によれば、ティファナ市内にサン・ディエゴつまり合衆国への密出国口があり、このルートを通じて、多い時には1万5千人も一晩のうちに出国するというのである。彼は、キャニオン・サパタと呼ばれる密出国口に数台の隠しカメラを常置し、毎夜、定時刻に連続的に撮影し、その写真に写った密出国者の数の統計をつくっているのである。実際に、その引伸ばし写真を見せてもらったが、たしかにキャニオン・サパタは、数えるのが困難であるくらいに多数の密出国者であふれていた。

このキャニオン・サパタにおいて密出国がおこなわれるのは、夕方の6時ごろから10時ごろまでで、それ以

外の時間には、ほとんどおこなわれないという。ここからの密出国者たちは、主として、サン・ディエゴを経由して、カリフォルニア州の農場労働者として雇われるか、中南部の中小企業に雇用されるのだという。時々、アメリカ側の警官が見にくるが、ほとんど、見てみないふりをするのだそうである。彼らは、帰国する際は、ここではなく、ティファナとサン・ディエゴの間にある国境入出国管理局の正式のゲートを通ってくるという。合衆国側にとっては、これらの密出国者は不本意ながら必要とする労働力なのである。

密出国のゲートであるキャニオン・サパタにも案内をしていただいた。ティファナ空港に比較的近いところにあり、国境沿いを走る道路の片側に有刺鉄線が張られてあり、そこからはアメリカ合衆国の領土なのである。この鉄線も、腰の高さより少し高い程度であり、背の高い人であれば、またいで、アメリカ領土に入れる程度のものであった。ティファナの市街地を離れて、しばらくして着いたのが、キャニオン・サパタであった。キャニオンすなわち谷であるが、実際は、非常に緩やかな谷間であり、ここには国境を示す有刺鉄線は張られていなかった。水の流れていない小さな川らしき溝が、両国の国境であった。メキシコ側には、飲食店らしい屋台がいくつか並んでいた。アメリカ側は、木が一本もない乾燥した広い平原であり、多数の密出国者たちがつくった数條の踏み分け道が遠くまでつづいていた。朝方であったので、数人の人影が見られるだけであった。われわれは、この溝を越えて、数百メートルもアメリカ合衆国の領土に入ることができた。まさに、徒歩で国境を越えたのであった。

(宇都宮大学)